

## 「介護研究」テーマに見る介護学生の介護に対する思い

中山 和子

### 要 旨

介護福祉士の役割は、日常生活が不自由な高齢者や障害者の生活をサポートすることであり、その方達の生活環境が多様化するに従い複雑になって来る。人は心身の具合により体調は日々変化する為、介護は一様ではなく、一人ひとりに合わせて行われるべきである。相手に合わせた介護実践に必要な“介護観”を育成するために、長野女子短期大学生活福祉専攻（以下「専攻」と称す）では、介護福祉士資格取得の必修授業として専攻開設以来「介護研究」の授業を2年次の前後期に実施している。2004年から2018年までの研究論文冊子15冊を基に、271事例のテーマから学生の介護観の変化をまとめたので報告する。

キーワード：介護福祉士養成、介護研究、求められる介護福祉士、介護観

## 1. はじめに

寿命が100歳を超える方が珍しくない超高齢社会のわが国の問題は、「介護」である。人は誰でも老化とともに日常生活が不自由になるのは仕方のないことである。しかし、その程度が重度になると、その生活を支えるのは家族だけでは難しいのが、核家族社会の現代では当然である。三世代家族であっても、日中は高齢者のみの世帯になることが多い。その為“介護の社会化”として、介護福祉士の役割は年々重要になるのである。

介護福祉士の養成は、現在、専門学校から短期大学・大学まで幅広く開設されている。資格取得を目指す為に“到達目標”を定め、資格取得後の“求められる介護福祉士像”を掲げ、質の高い介護福祉士の養成に力を入れている<sup>1)</sup>。実際には、「こころとからだのしくみ」「人間と社会」「医療的ケア（2014年～）」といった領域の基礎知識を基に、「介護」「実習450時間以上」を含めて「合計1,850時間以上」<sup>2)</sup>の膨大な授業・演習を2年間で修了する必要がある。その後、介護福祉士国家試験を経てやっと「介護福祉士国家資格」を手にすることが出来るのである。「介護福祉士養成の目標」の「求められる介護福祉士像」には、高度な知識・技術を要する内容が多く、教育改正が行われるたびに学生達だけでなく、私たち養成校の教員も“ゆとり”のない、時間に追われる教育現場を憂いているのである。

「介護のイメージを上げる」「介護の質・モラルを高める」「学問として看護に並ぶ専門性を掲げる」等々の名の下、“知識・技術”に重きを置いた授業を追求するあまり、「優しいだけでは介護士にはなれない」と言われるようになってきていることも事実である。これでいいのだろうか。介護される側から考えると、気持ちを分かってくれて優しく接してくれる人に介護されたいと思う。

又、最近の学生と接し思う事として、他人との関係が作りづらい、コミュニケーションが下手、自分の気持ち・意見を他人に伝えられない等々といった若者が増えてきていることも事実である。“頭は

良いが、人間関係が構築できない”学生を毎年見かけるようになって授業や実習に苦勞していると、長野県内の養成校教員からも聞く。しかし、こうした学生が、2年次の中頃には一人ひとり確実に成長していることに驚くことが多い。この成長は、友人関係や教員との関係からではなく、実習での利用者との関係からに他ならない。利用者の「ありがとう」や励ましの声かけが、学生達の緊張や不安をほぐし、自信をつけてくれる大きな存在になっていると確信している。人は他人（ヒト）によって成長するのだということを学生から学ばせてもらっている。

介護福祉士の養成課程も社会情勢に合わせて、“対象の理解”に力を入れている。身体面・精神面のみでなく、その方が生活している社会環境にもしっかり目を向け、利用者の気持ちや考えを尊重する姿勢が求められる。その為に本専攻では「介護研究」授業で、受け持ち利用者の理解を深めることを目的としているのである。知識・技術だけでなく、介護する人としてその感性を育てることを大切にしたいと考える。この感性こそ一人ひとりが介護福祉士として持つべき思いや意識、すなわち「介護観」である。それは、知識や技術と同様に経験を積むに従って成長変化するものである。専攻では、「介護研究」をまとめた後「介護観」を書いて冊子に載せている。卒業時の自身の介護観が、数年後にどう変化したか、スタートラインを確認するのに役立ててほしいと願うからである。

## 2. 研究目的

本専攻では開設当初から、2年次に介護実習の学びを振り返り論文にまとめる「介護研究」という1年間の必修授業がある。グループ毎に担当教員と個別指導で、卒業時に冊子にまとめるものである。2年次の老人福祉施設実習（3週間実習又は2週間実習）で受け持った利用者の、介護計画立案・実践やレクリエーション計画等を通して、学生自身が感じたこと・気づいたこと・考えたこと等々を論文にまとめるものである。この研究テーマには、その時代

背景や学生自身の能力・感性・環境も反映されていると考えられ、学生の介護に対する意識（介護観）を探ることで、本学における介護研究授業の意味を追求することを目的とする。

### 3. 研究方法

2004（平成16）年から2018（平成30）年まで15年間の卒業研究冊子を基に、学生の「介護研究（初期は卒業論文）」「介護事例のまとめ」のテーマを振り返ることで、学生の介護に対する考えや思いの変化や、時代背景の影響などを考える。

年度毎に「介護研究」「介護事例研究」のテーマを要約し、その特徴を挙げて、テーマから考えられる年度の変化を比較する。テーマとして取り上げられている「疾病・症状」「学生の主観・思い」「課題・主題」「介護ケア」などを中心に特徴とする。介護事例そのものは、介護者（ここでは学生）の“思いや主観”でまとめられることが多いため、事例一つひとつ明らかに区分することは難しい。よって、この要約も筆者の主観によるものであることを先に述べておく。

### 4. 結果及び考察

#### 1) 介護福祉士養成と「介護研究」授業の開始

本学での介護福祉士養成までは紆余曲折がある。1967（昭和42）年に短期大学の認可を受けて家政学科が誕生する。1989（平成1）年に家政学科から生活科学科に改称。1997（平成9）年に生活科学科の中に生活科学専攻（ヘルパー養成他）と食物栄養専攻（栄養士養成）が開設され、2002年までは2専攻であった。2003（平成15）年に介護福祉士養成のための生活福祉専攻が開設され3専攻となる。2006（平成18）年に生活科学専攻が廃止、児童福祉専攻が新設されるが2010（平成22）年に廃止された。以後2専攻で経過している。以上のことから、本専攻での介護福祉士養成が開始されたのは2003年からとなり、「介護研究」授業は2004年の2年生が始まりとなる。

「介護研究」の授業は、開設当初2年間は専門

教科の3つのセミナー（生活・基礎・卒業研究）の一つとして位置づけられスタートした。これは、本専攻において早期から介護福祉士養成の目標を高く掲げていたことを示している。

本専攻における「介護研究」授業の位置づけは、2004年、2005年の2年間は「卒業論文」とされ、学生数も多く51の論文が発表されている。2006年から2010年までの5年間は、「卒業研究・介護事例のまとめ」として110の論文が発表されている。2011年から2018年の8年間は、「介護事例研究」として110の論文が発表され、合計271の論文が発表されたことになる。

年度別テーマ数		
西暦（平成）	介護研究	事例まとめ
2004（16）	24	—
2005（17）	27	—
2006（18）	20	15
2007（19）	12	10
2008（20）	10	10
2009（21）	6	4
2010（22）	11	12
2011（23）	21	—
2012（24）	19	—
2013（25）	9	—
2014（26）	22	—
2015（27）	9	—
2016（28）	9	—
2017（29）	12	—
2018（30）	9	—
計	220	51
合計	271	

#### 2) 年代別特徴

年度別テーマの特徴は次の通りである。

「卒業論文・介護観」としてまとめられた冊子は2004（平成16）年、2005（平成17）年の2年である。2004年は24例あり、（信頼される）（利用者の気持ちを理解）（安心感）（コミュニケーション）（笑顔）（優しい）（心からの介護）といった利用者との関係構築を主に、「どういう介護士になりたいか」と学生自身の目指す方向をテーマにして述べている傾向がある。（残存機能を活かす）といった介護技術に視点を置いた事例も1つある。



2005年からは「卒業研究」「介護事例のまとめ」「介護観」としてまとめられ、論文は27例である。(信頼される)(利用者の気持ち・立場)(思いやり)(コミュニケーションの大切さ)(心から介護する)など、(利用者の気持ちを尊重する)(信頼関係の大切さに気づいた)(〇〇氏から学ぶ)と利用者との関わりを述べる内容がみられる。『自分が……』ではなく『相手を……』と明確に記述しているケースが27例中5例みられる。

2006年は35例である。この年から「卒業研究」が「介護研究」に変更される。この年の特徴として、「介護研究」に現場検証や動物愛護センターの見学など現場に出かけて考えることや、アンケート調査、文献検索などのまとめを取り入れるなどの工夫もみられるようになる。指導教員の影響が大きいと思われる。特に、(長野駅周辺のバリアフリー検証)グループの、(車いす自走での自立調査)(地下駐車場からホームまでの検証)(障害者トイレ、車いすの種類)(法律と現実)といった実際に歩いて回ったまとめは、写真入りで、詳細で膨大な実地検証報告である。他に(アニマルセラピー)(認知症の心理)(老化の受け止め方と介護者の役割)(高齢者とリハビリ)などがある。

「介護事例のまとめ」では、認知症を取り上げた事例が20例中7例あり、(認知症と意欲向上)(認知症と脱水予防)(レクへの参加)(安全な歩行)など認知症利用者の生活を幅広くテーマに取り上げている。又、うつ病・リウマチ・片麻痺といった症例を取り上げている事例もみられる。他

に、嚥下障害・残存機能・移乗や杖歩行、意欲低下・閉じこもりといった介護事例にも着目している。

この頃より取り上げるテーマに“認知症”が目立つようになる。難しい事例に取り組もうというより、施設入所者に“認知症”の方が多くなって来たためではないかと思われる。



2007年は22例である。「介護研究」では、認知症(心理と援助)(症状別対応)、自閉症(非言語的コミュニケーション)、知的障害・失語症の(コミュニケーション)(着やすい介護服製作)の他、(在宅介護者の思いと介護負担)としてアンケート調査結果をまとめている。「介護事例のまとめ」では、認知症事例が5例で(残存機能を活かす)(筋力維持に向けて)(帰宅願望)(余暇時間を有意義に)といったテーマの他、(全盲、安全で意欲向上)(進行性麻痺、自分で食べる)(排泄の自立)といった状態に合わせた生活をテーマとしている。

2008年は20例である。「介護研究」で、(身体拘束について3施設アンケート)介護用品について(介護を楽にする小物のアイデア)(日常生活用品を介護に)(介護予防)といったテーマや、(口腔ケアと誤嚥予防)(失語症のコミュニケーション)(おいしく食べる食事介助)といった事例がある。「介護事例のまとめ」では、認知症3例、失語症・言語・聴覚障害4例と20例中7例が疾病・障害に関心を示している。(残存機能の自立支援)(拘縮)(穏やかな趣味生活)(楽しいコミュニケーション)



といったテーマである。



2009年は10例である。「介護研究」では卒業した高校2校にアンケート依頼した(若者の介護観)というテーマがみられる。他は(利用者の食事に対する思いの聞き取り調査)、(認知症の徘徊行動)(寝たきり者の口腔ケア)といった事例である。アンケート調査は、学生が高校へ行き旧担任に依頼したが、学生だけでは難しいことが多く、まとめるにあたり担当教員の力が必要となる。「介護事例のまとめ」では、認知症2例、片麻痺・寝たきり・言語障害が1例ずつで、(帰宅願望)(楽しく環境に慣れる)(残存機能向上)(生活援助として口腔ケア)(うちわ風船バレー・レクリエーション)というテーマである。

2010年は23例である。「介護研究」では、(入所家族の意識アンケート)(高齢者の重ね着)(片麻痺・弛緩麻痺の場合の着脱しやすい介護服製作)などがある。「事例のまとめ」では、認知症4例、全盲・視覚障害2例、上肢弛緩麻痺・片麻痺が1例ずつで、認知症と(もの忘れ)(徘徊行動)(暴力行為)や、(アームカバー製作、安全な生活)(おしゃれと生きがい)(コミュニケーション苦手)(生活意欲低下)といったテーマがみられる。受持ち利用者の衣類製作や、弛緩麻痺側の保護用アームカバー製作などは、家政学担当教員の助言も大きいと思われる。

2011年は21例である。この年から「介護研究」と「介護事例のまとめ」を「介護事例研究」と一本化して、学生の負担を少しでも減らす事になる。

認知症は7例で内3例は重度であり、(周囲とのトラブル)(孤独で生きがいを持つ)(聴覚・視覚障害ある人のコミュニケーション)(人的刺激心掛ける)といったテーマである。脊柱管狭窄症や手指拘縮などの症例もあるが、病気に捉われることなく、(表情乏しい)(閉じこもり)(意欲低下)(依存心)(友に会いたい)など日常生活の中での事例が多く、利用者の気持ちにしっかり向きあおうとする学生の姿が垣間見える。松本<sup>5)</sup>が「……誇りを支え続けるために私たちに求められるのは……人に対するところからの敬意」と述べているように、相手の気持ちを尊重する姿勢が感じられる。

2012年は19例である。認知症は6例で、(転倒予防)(レクを楽しめない)(難聴も合併して、他利用者との交流がうまくいかない)などをテーマに挙げている。又、(糖尿病性視力障害)(拘縮、コミュニケーション障害)(構音障害、コミュニケーション)(失禁多い利用者の不快感)といったテーマから、利用者の不便さに目を向けたり、(おしゃれ意識で意欲向上)(排便調整で在宅復帰に自信を持たせる)といった利用者の希望に沿うような働きかけをしている。

2013年は9例である。認知症は4例で、(難聴)(胃ろう造設)(視覚障害)を合併している事例や、(やる気のない)認知症事例といった難しい事例を受け持っている。他に、(便秘に苦勞しているパーキンソン病)(片麻痺の言語障害)(交流少ない片麻痺)(孤独な失語症)のテーマもみられる。



2014年は22例である。認知症は3例であるが、

全盲で重度知的障害（他者との交流）、片麻痺で嚥下障害（安全な健側活用介助）、（介護拒否）（終末期ケア）（言語障害のコミュニケーション）といった難しい事例を選択している。そのテーマからは（昔の遊びで生活の楽しみを）（笑顔を引き出す）（自分らしく楽しく自走）（お喋りが楽しみ）といった利用者本位の介護を実践している姿がみえる。

2015年は9例である。認知症は3例で、「（「したい」趣味で笑顔に）（威圧的な認知症の人とは穏やかな交流を）と、ここでも相手に寄り添う介護を展開している。（栄養補助食の利用者に食事を楽しく）といったテーマで根気のいる援助をしている学生が目につく。

2016年は9例で、認知症3例、難聴2例、孤立・引きこもりがちな人2例である。（好きなことで笑顔に・意欲向上を）（音楽で生活を活性化）（利用者の変化に合わせて）といったテーマで書いている。

2017年は12例である。夜間不眠・センサー使用の人を含め認知症4例で、（余暇時間の活用）（意欲的で楽しい生活を）といった取り組みで、特に『認知症だから』とあって構える事もない。頼もしい限りである。（難聴の人に絵カード使ったレクを）（個別レクで充実した余暇時間を）など、支援方法も学生なりに色々考えて実践している。

2018年今年度は9例である。認知症の1例を含めて（楽しい施設生活を）というテーマがほとんどである。（誤嚥の多い方、楽しく・意欲的に食べる工夫を）（入所間もないうつ病、生活リズムを作る）（歩行に不安のある孤独な方も施設で楽しく）などというテーマが続く。

15年間を振り返って思うことは、学生の様子はその年度によって違うことから比べることは難しい。しかし、年々取り上げるテーマに認知症の方が増え、その程度も視覚・聴力等多様な障害を合併し、重度化していることは事実で、そういった要介護の人たちが施設に入所して来る現代なので

ある。又、施設入所だけでなく在宅介護現場も、益々重度の要介護高齢者が増えるであろう。そのような状況であっても、学生は、真摯に利用者に向き合おうとする姿勢で、介護実習に臨んでいることを改めて感じる事が出来た。

## 5. 結 論

初期の頃は「卒業論文」として、学生のテーマから見える内容は（笑顔で）（信頼される）（優しい）（心からの介護）といった言葉が多く書かれている。又、学生が利用者のことを発表する際、「心に寄りそう」という言葉をよく耳にする。いずれも学生の主観から生まれた言葉である。

岡山県介護福祉士会編の実践事例集<sup>3)</sup>に『臨床実習としての介護』の専門性というものを考えた際、利用者とそれにかかわった当事者自身の感情を伴う「体験」や「思い」といった、主観的な感情が重要な意味をもつ」とあるように、学生は主観で物事を捉えてしまいがちである。実習で受持った高齢者から「ありがとう」という言葉に励まされて、つらい実習をのりきる体験をしている学生は多い。

又、学生の実習記録から気づいたことだが、“客観的な事実を書くこと”が苦手であることも事実である。客観的な事実を書いて、「それでどう思ったか?」「どう考え、どう行動したか?」という自身の思考過程を相手に伝える事は、介護現場で、チームケアをしていく上で、とても重要である。先の文献からも「専門性を高めていくべき教育・研修という意味でいえば、『客観的な・知識・技術』を高めていくことも……『体験を言語化』することは必要な学びである。」とあるように、相手に伝えるためにも、体験や主観的・客観的な事実を言葉にすることは必要である。

「介護研究」授業は、介護福祉士を目指す学生にとって「人間としっかり向き合う」「相手の気持ち（思い）を知ろうと努力する」「介護の過程を大事に文章化する」ということから必要な授業であると言える。学生は、介護実習でさまざまな利用者との出会い、現場での先輩介護士たちとの出会い、色々な体

験を通して、机上の授業では学べないことを多く学んでいる。「介護研究」授業でその学びをしっかりと振り返る作業を手伝うことが私たち教員の役割であると考えている。そのためにも、教員はもっと自己研鑽する必要があるということである。

## 6. おわりに

「介護研究」授業で教員は、毎年多くの時間と労力を遣う。個別指導であり、担当する学生の能力や状況によって、通常の授業時間だけでまとめることは難しい。論文をまとめ、提出して「介護研究」の必修単位が取得できることから、締め切り間際になって慌てる学生は毎年いる。平成21年までは、論文発表の冊子も教員総出で手作りしていた。卒業証書と論文冊子を手を、介護福祉士として巣立っていく学生への教員の応援歌であると自負している。

「介護研究」授業を、専攻開始早期から立ち上げた先輩諸氏には、心から感謝申し上げます。新たな専攻を立ち上げるという大変な時期に、しっかり将来を見据えた授業内容を構築されたその英断と努力に敬服するものである。この授業は、毎年学生と個々に向き合える貴重な機会であり、自身の勉強不足を思い知るきっかけにもなっている、楽しい時間だからである。

最近、介護現場の「認知症事例発表会」に参加する機会があり、現場の介護士たちの熱心で活気ある発表に、大いに刺激を受けた。介護現場は活気があり、学生達がそういった環境で、今後も成長できるということが分かって嬉しかった。

### <参考・引用文献>

- 1) 介護福祉教育 No25; '08 日本介護福祉教育学会; 中央法規出版
- 2) 介護教育方法論2008; 川延宗之; 弘文堂  
介護教員講習会資料を基に一部加筆修正; 2014
- 3) 「生活支援」の視点に基づく介護福祉士 実践事例集; 社団法人岡山県介護福祉士会編集2009; 中央法規
- 4) 介護事例研究; 介護事例研究会編; 建帛社

- 5) 喜怒哀楽でわかる 認知症の人のこころ; 松本一生他編2010; 中央法規
- 6) 社会福祉・介護福祉の質的研究 実践のための現場研究; 田中千枝子代表/日本福祉大学大学院質的研究会編2013; 中央法規
- 7) 介護福祉士・介護福祉学生のためのよくわかる介護福祉研究入門; 広島国際大学福祉学部矢原隆行著2010; 保育社
- 8) 認知症の看護・介護に役立つ よくわかるパーソン・センタード・ケア; 浜松医科大学臨床看護学部鈴木みずえ監修2017; 池田書店
- 9) 高齢者とのコミュニケーション 利用者とのかわりを自らの力に変えていく; 野村豊子
- 10) 介護職にいま何が求められているか; 一番ヶ瀬康子監修 日本介護福祉士会編; ミネルヴァ書房
- 11) 学生便覧・授業概要2000~2018年; 長野女子短期大学